

# みんぱく 私の逸品 魚皮衣

標本番号 K0004613  
地域 サハリン(推定)  
受入年度 1975年

アイヌ民族博物館副館長

村木 美幸

一九九三年に開催された、「アイヌモシリ」展で、はじめてみんぱくのアイヌ資料を見る機会に恵まれた。常設展示には複製された魚皮衣ぎよひいが展示されており、当時、サケ皮製靴ケレづくりのため、皮の加工処理や、縫製について調べていたこともあり、「触ってみたい」という衝動に駆られたことを今でも覚えている。

このとき目にした複製資料の原資料がシベリアで収集されたという魚皮衣である。魚皮衣は樺太や北海道、アムール川流域の民族にみられるもので、マスやサケ、イトウ、コイなどの皮を鞣なぶして製作される。襟や前立て、ウエストの切り替えや腰から裾にかけて波を打つような広がりのある形態などから、アムール川流域のナナイやウデへ、樺太のニブフ、ウイльтаとは異なる特徴をもつことがわかる。また、背面に施された切り替のあるV字形の文様は、ドレスデン民族学博物館とロシア民族学博物館に収蔵される樺太アイヌの魚皮衣に類似することから、現存する数少ないアイヌの魚皮衣のひとつと考えられる。

国内外の博物館等に収蔵されるアイヌの魚皮衣は、収集地の不明なものを除くと、そのほとんどが樺太で収集されたものである。長いワンピース状の魚皮衣はカヤとよばれ、樺太アイヌの女性の防寒着で、腰には金属の裝飾がついたカーニクフとよばれる皮帯が併用された。五〇匹ほどの魚皮から一着の衣が製作されており、頭と尾をとり除き、腹割にして身を剥ぎ、鞣した皮が使われる。背鰭せびれや脂鰭あかぢれなどをとり除いてできる穴や魚皮の継ぎ目には、魚皮をさまざまに形にカットした美しい文様が施される。

この魚皮衣をよく見ると、鰭の処理痕や文様が前身ごろと後身ごろとは違うことに気づいた。背面は手の込んだ文様が多く、前面はいたってシンプルで穴の補修といった程度である。「何を今更」といわれるかもしれないが、展示や図録の写真には背面を掲載することが多いので、衣服全体にさまざまに模った文様が施されていると思っ込んでいたのである。改めて手元にある国内外の魚皮衣の写真データ二三点を比較したところ、内二〇点が背面に文様を多く施していた。アイヌの工芸技術の継承や文様について再認識させてくれた資料である。

